

中国における満族シャマニズム研究の現状

王 宏剛 著

楠木 賢道・鈴木 真 翻訳

この20年、中国の学界はシャマニズム文化の研究を重視しはじめ、その中でも満族のシャマニズム研究は、次第に人々の注目をあつめるようになってきている。本稿はこの学術潮流の原因・現状（成果と不足）および発展傾向について、簡潔な総括と展望をおこなうものである。

1. 中国の歴史文化における満族の特殊地位およびシャマニズムとの関係

中国史上、満族とその先行民族である女真族は、金と清という2つの王朝をうち建て、約400年にわたって中原を支配した。人口の比較的少ない東北の少数民族が、短期間に2度も急激な勃興を果たし、さらに中国ひいてはアジアの歴史文化に重大な影響を及ぼし、世の人々が注目する歴史的奇跡を生み出したことは、歴史研究者の強烈な関心を喚起せずにはおかない。ただこれまでの歴史研究者の多くは政治・軍事・経済などの分野から、この問題に対してかなり研究成果を収めているが、満族の民族文化の研究は一貫して薄弱な分野であり、少なからぬ空白の領域もある。しかし文化にこそ民族興起の真の理由が存在する。

およそ北緯35度線以北の中国北方の広大な地域は、かつてシャマニズムが広く流布していた世界であり、紀元前2世紀末から13世紀初にかけて、中国古代史の文献、たとえば『史記』匈奴列伝・『後漢書』・『隋書』・『魏書』・『周書』・『契丹国志』・『遼史』などには、北方民族のシャマニズム信仰・儀礼・活動について要を得た記載があるものの、一貫してこうした北方民族の原始的な巫の呼称である「シャマン」には言及されていない。13世紀初になってはじめて、中国の古籍の中に「シャマン」の語が現れる。南宋の徐夢莘の『三朝北盟会編』の記載に、「兀室（完顔希尹）奸滑而有才。国人号为珊蛮。珊蛮者，女真語巫媼也，以其通变如神」とある。文中の「珊蛮」はすなわち「シャマン」という語の異音である。女真文字を考案した名宰相完顔希尹は「通变すること神の如し」の女真のシャマンのひとりだったのである。当時、シャマンは「能道神語、甚驗」であり、人と神の意思疎通の仲介を果たした。シャマンは族人の厄払いや病の治療をおこない、また呪文によって敵を災禍に遭わせることができ、また人のために子宝を授かるよう請うたりもした。『金史』の記載によれば、金昭祖（石魯）には子が無く、シャマンに請うて子宝を授かるよう祈願してもらったところ、果たして「生二男二女、其次弟先後使皆如巫者之言」という。シャマンはさらに当時の重要な典礼と各種の祭祀活動に参加しており、祖先・社稷・風雨雷師・

岳鎮海神の祭祀、および巡狩・出征などを挙行することを祖先天地に奏告する儀式の際には、すべてシャマンが参加あるいは主宰した。清代になって、乾隆12年に清朝が法典的性格をもつ『欽定滿洲祭神祭天典禮』を頒布したことは、清朝宮廷のシャマン祭祀がすでに国家典例の性格を帯びていたことをものごとであり、さらに民間のシャマン祭祀に対してある種の規範的作用を及ぼしたことは、満族のシャマニズムがすでに氏族宗教から民族宗教に発展していたことを反映している。政治・経済・科学技術・信仰・礼儀・文芸・民俗などの諸形態を持つ満族文化のなかで、シャマニズムは核心的地位を占めるが、これはシャマニズムが、満族とその先行民族の古より篤く信仰してきた自然宗教であり、その中に満族とその先行民族の深層次元における文化概念と民族精神が内包されており、かれらの民族生活の各種の方面に深く影響しているからである。このことこそ、今日満族のシャマニズム研究が活況を呈している歴史的な理由にほかならない。

2. 満族シャマニズム資料の新発見

今世紀の70年代に至るまでに、国外のシャマニズム研究がすでに1世紀以上のフィールド調査と諸分野の専門研究を経てシャマニズム学という専門領域を形成していたとき、シャマニズムは中国の学界においてはただの耳慣れない名称であり、とりわけ「文革」の最中であってはシャマンの活動は封建的・迷信的なものと見なされ、禁止されてしまっていた。

70年代末、改革開放の春風が中国の学界に吹き込み、80年代以降は、中国諸民族の伝統文化に関する研究が始まり、やがて盛んな研究の潮流を形成するに至った。1981年に『社会科学戦線』は武韜の論文「薩滿教的演變和没落」を掲載した。この論文は「漢族との政治・経済・文化上の交流が日に日に密接になるにつれ、(満族の)シャマニズムはきわめて急速に原初の形態を喪失し、仏教と混淆して、最終的には仏教の中に埋没してしまった」としたが、満族のシャマニズムの実情との間には大きな隔たりがあった。ただこの論文はシャマニズムが中国学术界の視野に入ったを示している。

1985年に『社会科学戦線』は富育光・于又燕の論文「満族薩滿教女神話初析」を発表した。この論文は、満族の女神神話が生まれ伝播する条件、すなわちシャマニズムの文化背景を論述し、女神神話の類型を分析し、シャマニズムの神論中に残されていた盗火の女神拖亜拉哈などの神話をはじめ明らかにし、「シャマニズムを愚民の巫術行為と簡単に見なす偏見を正し、シャマニズム研究に対する関心を激しく引き起こし、我が国の北方民族の先史文化を科学的に研究するため、一幅の生き生きとした歴史絵巻を提供し、斬新な研究課題と研究分野を示し」、満族シャマニズム研究の新たな方向性を提示した。

ただし、この斬新な課題と分野の開拓と発展は、中国の関係研究者の10余年の長きにわたる調査の基礎の上に成り立っていた。この種の深く分け入る困難に満ちたフィールド調査の中で、重

大な歴史文化的価値を有する満族シャマニズムに関する一群の新資料が発掘されていたのである。

中国の関係史籍・方志・文人の筆記中、満族シャマニズムに関する記載は比較的豊富であり、今世紀50年代、60年代に国家が組織した大規模な民族社会歴史調査も、当時満族が信奉していたシャマニズムの具体的な状況をいくぶん残し伝えてくれたとはいえ、全体としてなおまとまりを欠き、部分的であり、シャマンの活動と性格およびシャマニズムの基本観念・信仰系統・象徴体系など深層次元の核心的内容については系統立った具体的な記録が不足していた。このため、フィールド調査が満族シャマニズム研究に不可欠な基礎作業となったのである。

ここで私はシャマニズム研究に関して重要な貢献を果たした満族の研究者富育光を紹介せねばならない。かれは黒龍江瑗瑯の満族の名家に生まれた。同族の祖先は康熙朝の黒龍江將軍サプスであり、鑲黃旗に属していた。かれの出生地である大五家子郷は、当時、満洲語が通用した郷村のひとつであり、かれは幼少より満族文化の教育を受け、自民族の文化に対しては一種の自然な親愛感をもっており、1958年に大学を卒業して以後は、満族のシャマニズム神話や伝説などの口碑文学の収集と研究に主として従事してきた。80年代初めにかれは吉林省社会科学院文学研究所東北民族文学研究室主任の任にあったとき、「シャマニズムは北方民族の原始文化の宝庫であり、強力にフィールド調査の中から開拓する必要がある。研究作業は材料がなくては成り立たない」と提議した。これにもとづき、富育光と筆者は一緒に吉林・黒龍江・遼寧・北京・河北の承德など満族集住地域で長期間のフィールド調査を行い、楊世昌・何玉霖・石清山・閻文寛・高岐山・趙興亜・閔志遠・趙雲閣・趙礼・錢振才・富小昌・張榮久・郎文海・徐宝山・閔栢榕ら60余人の満族のシャマンを取材し、かれらと親密な友情を結び、ニマチャ・グワルギヤ・イエヘナラなど40余の氏族のシャマンの神本（満文・漢字音写による満文・満漢合璧の3種）と関係宗譜を収集したが、その中にはシャマニズムの祭程、神詞、神歌（かなりの部分は神話である）などの内容が含まれていた。また組織的に、『満族瓜爾佳薩滿祭祀』・『満族漢軍張氏薩滿祭祀』・『神偶与宗譜』（以上3部のテレビ特別作品は、捕鷹中に鷹神を祭る内容をふくむ満族民俗作品『海東青』と併せて、一セットのスライドフィルムに編集されている）・『尼瑪察氏野神祭』・『扈倫瓜爾佳薩滿祭祀』・『満族勅姓薩滿祭祀』・『満族火祭』・『星祭』・『雪祭』・『今日満族肇興地』（清永陵大祭と吳氏のシャマン祭礼を含む）など10余部の満族シャマニズムの特別作品を撮影し、野祭・家祭など代表的な満族シャマン祭祀および関係文物を含んだシャマニズムの写真600余枚を撮影し、シャマンの神話伝説と神歌を約15時間録音し、シャマンの神像と神服・神器など文物を200余件収集し、満族シャマニズム研究のために比較的系統的な新資料を提供した。

同時に、傅英仁・石光偉・宋和平・姜相順・劉厚生・孟慧英・馬名超・劉貴騰・郭淑雲・尹郁山・馬亜川・趙君偉・樂文海・張曉光・馬文業・趙明哲・沈秀清・魏北旺・王国興・程迅らに代表される多くの中国の研究者と民族幹部が、満族シャマニズム調査においてそれぞれの貢献を果たした。黒龍江・吉林・遼寧の三省の芸術研究所と民間舞蹈集成辦公室は各地の代表的な満族シャマン祭礼を撮影・編集したが、その中でも吉林が撮影した『石克特立氏薩滿祭祀』の内容は豊

富であり、代表的な作品である。東北三省の民間文学集成もまた満族シャマニズムの神話伝説と神歌の一部を採録している。

別の一分野では、富育光は父親である富希陸とその親友である呉紀賢・程林元・郭榮恩・郭文昌ら満族の先賢が今世紀20年代、30年代に黒龍江省瑗琿・孫吳・遜吳などの地区においておこなった北方民族のシャマニズムおよび関係する民俗の重要な調査ノートを受け継いだ。その中の『満洲神位發微』・『瑗琿祖風遺拾』・『富察哈喇礼序跳神録』・『呉氏我射庫祭譜』・『瑗琿十里長江俗記論』などのノートには満族シャマニズムの創世神話『天宮大戦』（三百女神の神系を含む）全体が記されており、また鷹祭・雪祭などのシャマン祭祀が記載されており、シャマンに関する神論・氣論・神祇原道観およびシャマンの活動と関連する民俗の重要記録があり、内容は満族シャマニズムの核心的奥秘にまで及んでいる。このほか、富育光が収集した史詩『烏布西奔媽媽』・『音姜珊滿』（『尼山薩滿』のこと）は満族シャマニズム文学の重要な代表作であり、かれが収集した満族の長編英雄伝説『東海沉冤録』・『兩世罕王伝』と、王宏剛・程迅が収集した『薩布素將軍伝』にはいずれも満族シャマニズムの重要資料が含まれている。出版が困難なため、これらの貴重なシャマニズム資料はいまだ系統的に出版されていないが、その中の重要な内容はかれらの論著において公表されている。

今世紀の60年代以降、中国東北地区および隣接するロシア（旧ソ連）極東地区の考古発見の中には、新石器時代・靺鞨・女真時代の満族の先行民族のシャマニズム文化を反映した文物がある。たとえば黒龍江省東部地区新開流・鶯歌嶺文化の遺跡の中から発見された骨雕鷹頭・骨雕遊魚・陶人・陶猪・陶熊・陶狗や、靺鞨時代の葬式・葬礼および副葬品、女真時代の頭頂に一羽の鳥を戴くシャマン像などは、満族の先行民族のシャマニズム研究のために信頼できる文物資料を提供している。

この20年、少なからぬ中国の研究者が文献・考古調査中の満族シャマニズム資料の整理を進めており、代表的な資料集と論著には以下のものがある。

陳見微選編『東北民俗資料薈萃』（吉林文史出版社、1992年）の中に「満族祭祀」の一章があり、東北三省の方志と文人の筆記中の満族シャマニズム資料を掲載している。

傅英仁収集整理『満族神話故事』（北方文芸出版社、1985年）は黒龍江寧安県のメイヘレ・ゴボル・グフルギヤなどの氏族に伝わる「断事女神他拉依罕」「海神突然烈瑪法」などの代表的なシャマンの神話故事17話を掲載し、故事の後にそれぞれの神の祭祀の状況を付記している。

王国興整理『薩滿神歌』（中国民間文学集成鉄嶺市卷編委会出版、1988年）は鉄嶺市漢軍八旗のシャマン陳俊清が演唱する13種の儀式歌を記録しており、かなり完全なかたちで漢軍のシャマン祭祀の全過程を知ることができる。

旧ソ連のデレヴィヤンコ著、林樹山・姚風訳『黒龍江沿岸の部落』（吉林文史出版社、1987年）は靺鞨・女真時代のシャマニズムの考古資料を整理している。

王宏剛・富育光編著『満族風俗志』（中央民族学院出版社、1989年）には「薩滿教信仰」の章があり、満族のシャマニズムの概況・祭祀・信仰体系の3分野の資料を整理している。

烏拉熙春編著『滿族古神話』（内蒙古人民出版社，1987年）は「三仙女」「尼山薩滿」など滿族神話9話を選び掲載しているが、大部分がシャマニズムと関係しており、故事の滿洲語原文が付されている。

『尼山薩滿』には、以下の訳本がある。

莊吉發訳注『尼山薩蛮伝』（台北文史哲出版社，1979年）

ウラジオストック滿文手稿本に依拠し趙展訳『尼山薩滿伝』（遼寧人民出版社，1987年）

遼寧本滿文手稿に依拠し季永海・趙志忠訳注『尼山薩滿』（『滿語研究』1988年2期）

宋和平訳注『滿族薩滿神歌訳注』（社会科学文献出版社，1993年）は吉林省九台市の滿族シクテリ氏のシャマン神本を全文訳注したもの。原文は滿文を漢字で音写したものであり、本書ではローマ字で滿洲語原文を転写し、対語訳を漢語で記し、さらに当該氏族のシャマン祭祀についての作者の調査、その中のシャマニズムの専門語彙についての注釈が掲載されている。全文は「大神神歌」「家神神歌」「請送神歌」の3編に分かれ、神譜と関係滿洲語の語彙集が付されており、この神本は滿族シャマニズムの中でも内容が豊富で完備しており、代表的なものである。

このほか、石光偉・呂樹坤「滿族石克特立氏薩滿燒香跳神歌舞錄像文学本」（『吉林省芸術集成文芸志』内部資料第5輯，1987年）・石文炳「滿族的信仰与祭祀」（『吉林市郊区文史資料』内部資料第4輯，1989年）・関吉友「祭祀中的察瑪」（『寧古塔滿族談往録』牡丹江文史資料第7輯，1992年）・趙君偉「趙氏族中大祭活動紀実」（『寧古塔滿族談往録』）・劉龍初・張江華・夏之乾「烏拉街韓屯滿族薩滿教調查」（『民族文化習俗及薩滿教調查報告』，民族出版社，1993年）・宋和平・魏北旺「瓊瑯富裕兩地薩滿文化調查報告」（『民族文学研究』1987年6期）・那良卿「伊通納音瓜爾佳氏家祭活動」（『吉林滿族』，吉林人民出版社，1991年）・関興亜・関金山「伊通納音瓜爾佳氏家祭回憶」（『吉林滿族』）などは滿族シャマニズム祭祀に関係する代表的な調査資料である。その中で「祭祀中的察瑪」は寧安のシャマン関吉友自身の経歴である。

金啓祿『滿族的歷史与生活』（黒龍江人民出版社，1981年）・『滿族民間故事選』（文芸出版社，1983年）・富育光『七彩神火』（吉林人民出版社，1984年）・于又燕・王禹浪・王宏剛『女真伝奇』（時代文芸出版社，1989年）・黒龍江省民研会編『黒龍江民間文学』（内部資料本）・白杉・卜伶俐『北方少数民族薩滿神話伝説集』（呼倫貝爾盟内部資料本，1995年）などの書籍の内容においては、いずれも滿族シャマニズムの神話伝説資料の部分を含んでいる。

中国の関係研究者と滿族シャマン文化の継承者の不断の努力によって、滿族シャマニズム資料は国内外にあって先進的な地位を占め、滿族シャマニズムとシャマニズム全般の研究のための確固たる基礎を築いている。

実際、少なからぬ中国の研究者が滿族シャマニズムに関してフィールド調査を進めているのと同時に、滿族の近隣のオロチョン・エヴェンキ・シボ・ヘジェ・モンゴル・ダグルルなどの東北少数民族のシャマニズムに関してもまた深く掘り下げた調査を行っており、豊富な第一次資料を蓄積しており、それによって滿族シャマニズム研究の視野はさらに広がっている。

3. 満族シャマニズム研究の成果

満族シャマニズムのフィールド調査が不断の深化をとげ、関係する考古・文字・口碑資料が次々と発見、整理、発表されるにつれ、満族シャマニズム研究は進展し、急速に中国北方民族の研究の焦点となった。このことは以下の3点が如実にものがたっている。

- (1) 1988年と1990年に吉林省民族研究所が2度の全国的なシャマニズム学術研究会を開催し、会の席上、満族のシャマニズムが中心的議題となった。この2度の学術研究会は『薩滿教文化研究』文集を2冊出版し、そのうち第1輯には満族シャマニズムの専論が6編掲載されている。
- (2) 1987年にシャマニズム研究が国家社科“七五”・“八五”の重点課題となってから、必要な経費援助を受けることができるようになり、課題責任者に富育光、構成員に王宏剛・孫運来・郭淑雲らになり、1992年に富育光・王宏剛が企画した『薩滿教文化研究叢書』が国家新聞出版によって国家“八五”・“九五”重点図書項目に指定され、遼寧出版社から出版された。
- (3) 中国の研究者と日本・アメリカ・韓国・ロシア・ハンガリー・ドイツ・フィンランド・イタリア・オーストリア・イギリス・ペルー・ノルウェーなどの研究者がシャマニズム研究に取り組み、かなり広範な学術交流を進めたが、その中の重要課題の1つが満族シャマニズムである。こうした学術環境において、中国の満族シャマニズム研究が重要な進展を果たした。

10余年来、中国の満族シャマニズム研究は以下の分野において探索と研究を進めてきた。

- (1) シャマンの特質、すなわちシャマンの発生・伝播・職能・禁忌・葬式など諸分野が表現してきたシャマンの特殊性質。
- (2) シャマニズム祭祀の類型およびその文化内容。
- (3) シャマニズムの信仰体系、すなわち自然崇拜・トーテム崇拜・祖先英雄崇拜・シャマン崇拜などを含む主要な神系。
- (4) シャマニズムの世界観、すなわち宇宙観・天空観・神論・氣論・魂論などを含む基本概念の探究。
- (5) シャマニズムの文化的機能、すなわち歴史と現実の結合中からみたシャマニズムの満族北方生活に対する実際の作用と影響。満族の社会組織・経済・科学技術・人生儀礼・文学芸術・民俗気風などの諸分野に対する強い影響。歴史発展の視角から文化哲学の分析と総括を進める。
- (6) 満族シャマニズムから全般的なシャマニズムの性質を探究し、これによってシャマニズムが人類文化に及ぼした歴史的な作用と地位を明らかにする。
- (7) シャマニズムから満族の精神文化を探究する。

筆者が上述した帰納的総括は初歩的なものである。上述のいくつかの分野において、研究の進

展は一律ではなく、ある分野においてはすでに系統的に研究が深められ、ある分野ではいまだ初期的な開拓段階にある。その研究成果は主として関係する著作と論文の中に見られるので、以下、代表的なものを選んで紹介しよう。

(1) 主要論文

富育光「満族靈禽崇拜祭俗与神話探考」(『民族文学研究』1987年6期)は、シャマニズムの視角から靈禽崇拜の古俗およびその神話の文化的意味と成立要因を明らかにした。

富育光「満族薩滿教星祭俗考」(『北方民族』1988年創刊号)は、満族シャマニズムの星祭および関連する神話と習俗を詳述し、中原の星座とは異なる、シャマニズムの伝承に基づく18枚の星図およびその文化的機能を分析し、シャマニズムが満族の天文・科学技術などの知識の伝承と伝播において重要な作用を果たしたことを明らかにした。

王宏剛「北方薩滿教研究中值得商榷的幾個問題」(『北方文化研究』文集、黒龍江省社会科学院文学所出版、1987年)は当時すでに調査済みの実証資料を用いて満族シャマニズムが決して「仏教の中に埋没」したのではなく、それ自体の発展規律に沿って変化したこと、さらに満族シャマニズムの祭祀儀礼・宗教施設・神諭祭規・神職人員などの基本的要素からシャマニズムがすでに一種の完成された自然宗教であったことを論証した。

富育光「論薩滿教的天穹觀」(『世界宗教研究』1987年4期)は満族薩滿教における最初の「無形態の天」から「九天三界説」への觀念変化、およびこれと対応する祭天儀礼と民俗を論述し、シャマニズムがすでに天神を主神とする一神教に変化する傾向があったが、ただなおこうした歴史的变化は完了しておらず、依然として原始宗教の多種の形態の特徴を保持していることを明らかにした。

王宏剛「満族薩滿教的三種形態及其演變」(『社会科学戦線』1988年1期)は関係する調査資料により今世紀50年代初めになっても、黒龍江・吉林省両省の満族が依然として広くシャマニズムを信奉し、さらに各種の形態のシャマン祭祀が存在していた事実を提示した。また祭祀の崇拜対象・儀式および頌唱する神諭が内包する宗教觀念から、満族シャマニズムはおよそ以下のように分類できるとする。①女神崇拜を主とする前期原始形態、②父系の英雄祖先神崇拜を主とする後期原始形態、③清朝宮廷の『欽定満族祭神祭天典禮』を受けて規範が簡略化された後の変化形態——家祭。

宋和平「満族薩滿教神歌の歴史演變」(『薩滿教文化研究』1輯、吉林人民出版社、1988年)は、吉林省満族の石姓と閔姓のシャマン神歌の差異を比較研究し、満族シャマニズムに異なる歴史段階の文化構造と内容が存在することを明らかにした。

その他の代表的な論文は以下のものである。莫東寅「清初満族的薩滿教」(『満族史論叢』、人民出版社、1958年)・富育光「清宮堂子祭考辯」(『社会科学戦線』1988年4期)・張樹卿「満族入関前後の薩滿教」(『四平社会科学』1988年3期)・孟慧英「満族的薩滿教」(『世界宗教研究』1987

年4期)・蔡家麒「中国北方民族的薩滿教」(『史前研究』1984年)・劉厚生「滿族的薩滿教是真正的民族宗教」(『北京滿學學術討論會論文』1992年)・劉小萌「滿族薩滿教信仰中的多重文化成分」(『阿爾泰語系民族敘事文學與薩滿文化』, 內蒙古大學出版社, 1990年)・閻崇年「滿族貴族與薩滿文化」(『滿學研究』3輯, 民族出版社, 1994年)・張曉光「關於薩滿教研究的幾點探討——兼談氏族本位系宗教與社會性宗教的差異」(『北方民族』1993年2期)・石光偉「淺談滿族信仰禮俗文化」(『文史知識』1994年6期)・烏丙安「薩滿世界的“真神”——薩滿」(『滿族研究』1989年1期)・王宏剛「薩滿初論」(『長師學報』1994年3期)・宋德金「金代宗教簡述」(『社會科學戰線』1986年1期)・王宏剛「薩滿教叢考」(『東北亞歷史與文化』, 遼沈書社, 1991年), 呂光天「論蒙古族與滿族的薩滿教消亡的歷史條件」(『北方民族原始社會形態研究』, 寧夏人民出版社, 1981年)・富育光「滿族火祭習俗與神話」(『民間文學論壇』1986年4期)・富育光「論滿族柳祭與神話」(『長春師院學報』1987年2期)・王宏剛「論薩滿教的柳崇拜」(『民間文學論壇』1992年2期)・趙展「論薩滿教與滿族祭祖的關係」(『滿學研究』2輯, 民族出版社, 1986年)・程迅「滿族陳漢軍燒香禮俗與唐王征東」(『薩滿教文化研究』1輯)・李果鈞「吉東滿族的信仰禁忌和歲時風俗」(『北方民族』創刊號)・程迅「試論滿族所祀神杆與神話來歷與性質」(『民間文學論壇』1983年4期)・程迅「滿族女神——佻托媽媽考辯」(『社會科學戰線』1986年4期)・翟立偉「從兩部家譜看吉林滿族祭祀舊俗」(『吉林師院學報』1987年2期)・烏丙安「滿族神話探索」(『滿族研究』1985年創刊號)・李治亭「關於三仙傳說的歷史考察」(『吉林大學學報』1985年2期)・汪玢玲「論滿族水神及洪水神話」(『民間文學論壇』1986年4期)・汪玢玲「中國的普羅米修斯: 托亞拉哈與托阿恩都里」(『北方民族』1988年1期)・趙志忠・姜麗萍「尼山薩滿與薩滿教」(『滿族研究』1993年3期)・宋和平・魏北旺「尼山薩滿與薩滿文化」(『阿爾泰語系民族敘事文學與薩滿文化』, 內蒙古大學出版社, 1990年)・孟慧英「論尼山薩滿的歷史性質」(『中央民族學院學報』1987年5期)・賀靈「錫伯族“薩滿歌”與滿族“尼山薩滿”」(『阿爾泰語系民族敘事文學與薩滿文化』)・富育光・王宏剛「論開發長白山滿族古文化資源的基礎及前景」(『長白山文化論說』, 吉林文史出版社, 1994年)・劉厚生・高雲芳「長白山滿族的聖山——滿族的祖先崇拜與薩滿教信仰述略」(『長白山文化論說』)・富育光・王宏剛「靈兮, 長白山——滿族長白山崇拜的文化情結」(『長白山與滿族』, 吉林文史出版社, 1998年)・王宏剛・于國華「長白山崇拜與滿族薩滿教舞蹈」(『長白山與滿族』)・敦冰河「談薩滿教與滿族舞蹈」(『滿族研究』1987年2期)・富育光「滿族佩飾考源」(『四平民族研究』1989年2期)・王宏剛・金基浩「論滿族崇鷹習俗」(『滿族研究文集』, 吉林文史出版社, 1990年)など。

(2) 主要著作

富育光『薩滿教與神話』(遼寧大學出版社, 1990年)は、滿族シャマニズムを主要な研究対象とし、シャマニズム神論・多神崇拜・祭類祭程・シャマント術・北方神話・神偶の6つのテーマを論述している。「シャマニズム神論」の章は老シャマンの間でずっと以前から流伝してきた神々の原道観、すなわち神は超自然の神として原道によって宇宙空間に生存しており、しかも人類

の生活に重大な影響があり、シャマンは祈・祭・夢・授などの多種の形式の祈祝方法を通して神々の原道原属にしたがい請願・交流することによって、はじめて神の力を借りて人類の平安幸福を庇護する祈願目的を達成することができることを、初めて提示した。シャマニズムの神——シャマン——人の基本的関係が、シャマニズムの最も基本的な宗教観念であることを実際に明らかにした。この章はさらにシャマニズムの神論の時期区分・気運説・三魂説・シャマン神系・九天三界説をも論述した。「多神崇拜」の章はシャマニズムの主要神霊系統を分析し、「祭類祭程」の章はシャマニズムの主要祭礼を論述し、「シャマント術」の章はト術の性格、種類、作用およびその中の思想観念を論述し、「北方神話」の章は、シャマニズムと北方神話との関係を論述し、シャマニズムが北方古神話を伝えるものであるとの考えを示し、創世神話・族源神話、祖先英雄神話・シャマン神話などの北方神話の主要類型を分析し、もともと黒水女真人が伝えたシャマニズム創世神話「天宮大戦」を最初に系統的に発表した。「神偶——薩滿靈魂世界的幻象形体」の章は神偶がうまれた要因および諸種の形態を論述し、神偶誕生の宗教的手順を詳述し、神偶嗜血の宗教観を明らかにした。

富育光・孟慧英『滿族薩滿教研究』（北京大学出版社，1991年）は滿族シャマニズムの歴史沿革・祭祀・シャマン・神偶・神論・祭神器具・世界観・多信仰的發展・理論思考の9つのテーマを論述した。「歴史沿革」の章では、考古学及び関係する民俗資料を引用して新石器時代・靺鞨時代・金代の滿族の先行民族のシャマニズムを探究している。「神論」の章は滿族シャマンの神論には口録、実物、文字などの多様な伝承形態があることとその主要内容、そして神論の発生と預託について論述した。「理論思考」の章は関係するシャマンの7種の解説を分析し、シャマンは昏迷入境をへて神霊が憑依することによって、神の意志と行為を表現する侍神者であり、神論に通曉し、あまたの望みを代わって伝え、人と神の間を往来して民のために奉仕する特殊な人間であるという考えを提示した。

富育光・王宏剛『薩滿教女神』（遼寧人民出版社，1995年，国家社科“八五”重点項目，国家“八五”重点圖書項目）は創世女神，自然——文化女神，トーテム——始母神，シャマン女神，女神崇拜の歴史文化意義の5つのテーマを論述しているが，滿族シャマニズムがおもな研究対象となっている。「創世女神」の章は，創世神話「天宮大戦」とシャマン叙事詩「烏布西奔媽媽」の中に存在する三百女神の神系の成立とその中の歴史文化価値を論述した。「自然——文化女神」の章はシャマニズムの自然女神の主要類型を分析するとともに，自然女神がしばしば文化英雄神の神格を兼ね備えており，シャマニズムの自然崇拜においては，人類自身の文化能力に対する崇拜も含まれているという考えを提示した。「トーテム——始母神」の章は近代のトーテム女神の残存と，滿族が普遍的に祭祀する柳始母神およびそれと女戦神との関係を論述し，先史・考古学資料を用いて石器時代の始母神を探究分析し，歴史資料を用いて古代北方民族の民族始母神を考察した。「シャマン女神」の章は滿族の天女シャマン——烏布西奔媽媽と尼山薩滿を論述した。そして最後の章の理論的考察の部分では以下のような考えを提示した。すなわち，先史時代において，女神崇拜は原始の人類が争いを引き起こして互いに殺し合うことを防止し，初期母系時代

に2つの氏族が群婚制度を樹立・発展させるために、イデオロギーの保証と推進力を提供し、これによって人類自身の生育を健全な発展軌道に乗せた。女神崇拜は氏族権威の発生と強化を促進させ、氏族構成員間の関係を協調させ、古人類の集団意識を向上させ、氏族群が連合する力を十分に発揮させ、それによって人類が自然を征服する能力を大いに向上させ、人類社会の文化発展のために広い道を開いたのである。女神崇拜は宗教という一種の比較的安定したイデオロギーによって、原始人類の文化成果を不断に伝承し、発展させ、それによって北方古人類の物質文化と精神文化の双方の発展を推進したのである。シャマニズムの精神文化の基盤は集団主義的英雄崇拜であり、こうした集団意識が北方民族の性格と観念を形作ったのであり、このことが歴史上しばしば急速に勃興した文化の原因である。シャマニズムが内包する集団意識、英雄の気概・犠牲的精神の3つの要素は、人類の未来の文化発展に必要な要素である、と。

石光偉・劉厚生編著『滿族薩滿跳神研究』(吉林文史出版社, 1992年)の序論は滿族シャマニズムの跳神行事の概況と特徴を論述し、本論は「跳家神」・「放大神」・「祭天神」の3部分に分かれ、吉林省松花江上流域の滿族の石・奚・肇・傅・高・閔・趙・郎・楊・徐など10余りの氏族のシャマニズム神本(多くは滿文原本が附されており、ローマ字転写と漢文訳本がある)、及び関係する祭祀状況を紹介しており、シャマニズムに関する重要な滿文用語の一部に注釈をつけている。本論の後には「吉林省九台市蟒牛滿族郷東哈村石克特立氏(石姓)漢字記音滿語神本選編」と「吉林省永吉県土城子滿族朝鮮族郷聶司馬屯漢軍旗香“壇序与神本”」を付録している。書中にはシャマニズム祭礼と祭器の写真が18枚附されている。

劉厚生編著『清代宮廷薩滿祭祀研究』(吉林文史出版社, 1992年)の前半「清代宮廷薩滿祭祀初探」は清宮のシャマニズム祭祀および関係する三部の歴史文献についての総論である。後半は清の乾隆12年(1747)の『欽定滿洲祭神祭天典禮』(清允祿總辦, 『四庫全書』所収)・近代の『重訂滿洲祭神祭天典禮』(鷄林金九經編輯)・清の道光8年(1828)の『滿洲跳神還願典例』(覺羅普年編著)の3部のシャマニズム重要文献に評点注釈を施している。

姜相順『神秘的清宮薩滿祭礼』(遼寧人民出版社, 1995年, 国家社科“八五”重点項目, 国家“八五”重点圖書項目)は清宮シャマニズム祭祀の場所・種類と順序・神靈・祝辞・シャマニズムとその職員・神具と祭器・犠牲・供品と歌舞の奉納・淵源と変遷・盛京の堂子および清寧宮祭祀・京師の堂子祭・坤寧宮祭祀など12のテーマを論述し、清宮シャマニズム祭礼の全容および伝統的シャマニズムとの関係を明らかにした。

王宏剛・金基浩『滿族民俗文化論』(吉林人民出版社, 1993年)の第6章「滿族信仰民俗文化論」は、滿族シャマニズムの発展の歴史、祭礼と信仰体系、および仏教との関係を論述し、シャマニズムの蛇・柳・鷹崇拜から滿族の先行民族の生存意識と民族精神を明示した。

この10年余りの間に、その他にも少なからぬ著作が滿族シャマニズムの重要分野に論及している。その中で代表的な著作は以下のものである。秋浦主編『薩滿教研究』(上海人民出版社, 1985年)・烏丙安『神秘的薩滿世界』(三聯書店上海分店, 1989年)・劉小萌・定莊宜『薩滿教与東北民族』(吉林省教育出版社, 1990年)・彭勃『滿族』(民族出版社, 1985年)・王可賓『女真国俗』(吉

林文学出版社、1988年)・韓耀旗・林乾『清代滿族風情』(吉林文史出版社、1990年)・楊英傑『清代滿族風俗史』(遼寧人民出版社、1991年)・尹郁山編著『吉林滿俗研究』(吉林文史出版社、1991年)・王宏剛・張志立主編『東北亞歴史与文化』(遼沈書社、1991年)・張碧波・董国光主編『中国古代北方民族文化史』(黒龍江人民出版社、1993年)・莊吉發『薩滿信仰の歴史考察』(台北文史哲出版社、1995年)・黄任遠・楊治経『通史斯——滿語族神話比較研究』(台北洪叶文化公司、1997年)。

近く出版が予定されている著作には、以下のものがある。王宏剛『滿族与薩滿文化』(中央民族大学出版社、1998年)・王宏剛・富育光・郭淑雲整理『滿族薩滿教資料』(中国社会科学出版社、1998年)・王宏剛撰「滿族薩滿教辞条」(『中国原始宗教百科全書』、四川辞書出版社、1998)など。

4. 滿族シャマニズム研究の不十分な点と發展傾向

20年前、シャマニズムが中国学術界において新たに知られるようになって以後、今までに上述の論著が出版されており、滿族シャマニズム研究はすでに重要な進展を見せ、熱い学術的潮流を形成しているといえるが、ただ筆者が見たところ、なお以下のような不十分な点がある。

(1)いまだなお国際学術界と本格的な提携がない。この20年、中国の研究者は10数カ国の研究者と滿族のシャマニズム研究の度重なる学術的交流を進展させ、筆者はかつて日本の細谷良夫・諏訪春雄・加藤直人・江夏由樹・萩原秀三郎らの研究者と滿族シャマニズムの共同考察をしたことがあり、一部の中国のシャマニズム研究者が日本・ロシア・ハンガリー・フィンランドなどの国の学術機関に赴いて交流を進展させており、また富育光・王宏剛の關係論文がアメリカで発表されていたりはする。ただ言語的障壁と困難な出版事情により、国外のシャマニズムの著作と学説は中国で流布したことはなく、このため、中国のシャマニズム学界は国外の研究成果を十分に参照することができず、研究成果の理論水準に影響を及ぼしてしまっている。実際、相互の学術的観点と理論を円滑に疎通させることが不可能なので、国際間の交流と協力にも影響を与えているが、これは中国の研究者の外国語レベルがやや低いことと関係している。

(2)中国の滿族シャマニズム研究には深化の余地があり、ある者は研究段階の向上を説く。たとえばシャマニズムがシャマンに由来して命名されているならば、シャマンの性格はシャマニズム研究の核心的問題のひとつである。ただ目下のところ中国におけるシャマンに対する研究はまだ全般的な表象に停滞しており、シャマンの精神現象の核心である脱魂と憑依問題については論究するところが非常に少ない。ただ実際にはかなりの中国の研究者がフィールド調査中にシャマニズム研究を行っており、条件があえばかなり難しい問題を研究している。

(3)中国における満族シャマニズム研究にはなお系統化が必要である。満族の分布区域は広範なので、シャマニズムの具体的な形態はきわめて豊富であり、このため、個人的調査をしても局部的なものとならざるを得ない。全体としていえば、満族シャマニズムの調査資料は豊富でありまた比較的整っているけれども、資金と出版事情のため、資料書を出版することはかなり困難であり、このため一般の研究者は系統的に資料を掌握することが非常に困難で、研究作業の系統性を欠くこととなっている。たとえばシャマニズムの象徴体系は非常に重要で人の関心を呼ぶ課題のひとつであるが、ただ系統的に資料を掌握していないために、完成させることが困難な課題である。現在、中国の学术界は基本的には手作業段階にあり、いまだにコンピュータ時代に進んでおらず、学術的情報は即時の交流ができないため、不必要な重複研究から逃れることが難しく、現在はひとつの学術機構としての協調も欠いている。

自己の不足を明らかにするのは、よりはやく、より効果的に自己を向上させるためであり、現在、中国のシャマニズム学は深化に向かい、系統的研究ならびに国際学术界交流の趨勢の発展は、一方で外国語を学習し、交流の基礎を築き、他方で各種のルートを経由して、可能な限りあらゆる国際的なシャマニズム研究の成果と発展傾向を理解することが必要であり、筆者と富育光らの人は、この数年内にシャマンの精神現象である“奪魂”・“憑依”問題を、祭礼全体の文化的雰囲気と結合させて深化させた研究を準備しており、またシャマニズムの象徴体系およびシャマニズムと北方古文化の関係についても系統的な研究を準備している。